

弘前からみる東北の近代化

—歴史総合における教材化の試み—

Tohoku region modernization from the perspective of Hirosaki: For teaching materials in “Modern and Contemporary History”

篠塚 明彦*

Akihiko SHINOZUKA*

要 旨

2022年度から、高等学校で新科目「歴史総合」が実施される。歴史総合は日本史と世界史とを融合し、近現代の歴史を取り扱う科目である。この歴史総合では、地域からの視点が十分に位置づけられずに政権所在地中心の日本史と世界史との融合になってしまう可能性もみられる。そこで、地域史研究の成果に依拠しつつ、北東北の一地域である弘前から、東北や日本のあり方を考察する授業の構想を検討する。その際、東日本大震災以降顕在化した東北地域の諸問題が、単に巨大地震と大津波による被害がもたらしたのではなく、近代以降の歴史のなかで「天災と人災の十字砲火」によってもたらされたものであるという課題意識のもと授業構想を進めていく。具体的には歴史総合の大項目「近代化と私たち」において「東北にとっての近代化とは何か」という主題を設定し、弘前における独自の近代化のあり方に焦点を定め、史資料をもとに考察を深め探究していく授業構想を提起する。

キーワード：歴史総合、地域史、近代化、東北地方、洋館

1. はじめに

現在、新しい学習指導要領への移行が進められている。2020年度から小学校、2021年度からは中学校が新学習指導要領へと移行し、そして、2022年度からは高等学校で新学習指導要領への移行が始まる。高等学校では学年進行で新課程への移行が進められるため、2024年度に新学習指導要領にもとづく新しい教育課程への移行が完成することになる。この新教育課程への移行に伴っては様々な変革が行われるが、その中でも最も大きな変革の一つと言えるのが、高等学校地理歴史科・公民科の科目再編であることは間違いない。そのなかで注目されるのが、「歴史総合」、「地理総合」、「公共」という科目の新設である（右図参照）。いずれも2単位の必修科目とされており、2022年度以降は全ての高校生がこれらの科目を学ぶことになる。この新設3科目のうち、歴史総合は、これまでに「知識偏重」、「詰め込み」との批判を受けることも多々あった歴史学習の大転換を図るために創設されたものでもあ

～2021年度入学者	新過程
地理歴史科 世界史A（2単位） 世界史B（4単位） 日本史A（2単位） 日本史B（4単位） 地理A（2単位） 地理B（4単位）	地理歴史科 歴史総合（2単位）* 地理総合（2単位）* 日本史探究（3単位） 世界史探究（3単位） 地理探究（3単位）
公民科 現代社会（2単位） 倫理（2単位） 政治・経済（2単位）	公民科 公共（2単位）* 倫理（2単位） 政治・経済（2単位） *必修科目

高校科目改編図

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Education, Faculty of Education, Hirosaki University

る。

2006年の秋に起こった、いわゆる「世界史未履修問題」¹⁾を直接的な契機として、高校歴史教育のあり方についての議論が活発に行われるようになった。そのあり方を巡る議論がつみ重ねられてきたなかで歴史総合が誕生することになったのである²⁾。

文部科学省が示した「平成30年改訂高等学校学習指導要領教科・科目名英訳版(仮訳)」³⁾によると歴史総合の英語表記は、Modern and Contemporary Historyとされている。その英語名からもわかるように、歴史総合は近現代史を学ぶ科目である。また、従来の日本史と世界史という枠組みを排して両者を融合した科目となっている。歴史総合の内容構成についての詳細は後述するが、4つの大項目から構成され、A「歴史の扉」のあとに、B「近代化と私たち」、C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、D「グローバル化と私たち」という3つの大項目が置かれている。近代から現代までを3つの時期区分にわけ、学習を進めることになっているわけである。

さて、この歴史総合は近現代史を扱うとともに、日本史と世界史を融合するものとして新設されているのだが、これまでの教科書的な日本史で描かれてきたものは、政権所在地を中心とした日本史像であり、地域からの視点、いくつもの日本史という視点が十分に位置づけられているとは思えない。もちろん、歴史研究の進展に伴い、部分的には地域からの日本史やいくつもの日本史といった視点が組み込まれてきてはいるものの政権所在地を中心とした日本史像を大きく転換するには至っていないといえるであろう。このような状況のもとで日本史と世界史を融合すれば、地域からの視点が欠落することにもなりかねない。日本が近代化する過程で日本の諸地域には様々な影響がおよび、変容を余儀なくされてきた。ことに東北という地域は、近代において一体とした空間としてとられられるようになり、さらには「後進性」というイメージが構築されてきた⁴⁾。そのことは、現代社会における東北地域のあり方にも少なからず影響を及ぼしている。歴史総合では、近代化の歴史と現代社会の諸課題とを結びつけて考え、解決の方向性を考察することが求められている。東北にとって近代とどのような意味を持ったのか、そして、それは今どのように影響が及んでいるのかということは、まさに歴史総合で取り上げべき主題に他ならないのである。

2021年は東日本大震災から10年目の節目となった。10年の時を経て、一見、東北の被災地は随分と復興し

たようにも思えるが、詳細に見ていくとまだまだ復興道半ばともいえる状況が続いている。東北の被災地がこれほどまでに大きなダメージを被ることになったのは、言うまでもなく災害をもたらした東北地方太平洋沖地震がマグニチュード9というこれまでに経験したこともない巨大な地震であったことにある。しかし、巨大地震とそれに伴う大津波だけが東北を困難な状況に追い込み、今も多くの人々を苦しめている原因ではないことも指摘されている。近現代史を専門とする河西英通は、「東日本大震災は869年の貞観地震・津波以来、1142年ぶりに起った巨大震災であったが、単なる天災ではなく、このクニの近現代史が生み出した必然的な人災でもあった。「天災と人災の十字砲火」と呼ぶべきであろうか」と述べている⁵⁾。すなわち、近代以降、東北がおかれてきた歴史的状況が、被害をより一層大きなものにしたというわけである。

このような課題意識のもと、本稿においては東北地域史の視点を組み込んだ歴史総合の授業構想を考えていきたい。とくに弘前や津軽という東北の北に位置する地域から近代日本のあり方を検討し、教材化の視点を探っていきたい。

2. 地域史研究・東北史研究の動向

教材化について検討する前提として、まず地域史研究および東北史研究の動向について簡単に整理しておきたい。

日本における地域史研究は、1980年代頃から一つのムーブメントが作られてきたように思われる。それは、地域を単に全体の中の一部としてとらえるのではなく、地域史から全体史を捉え直そうという動きと言えるのではないだろうか。1988年、近代史家の鹿野政直は『「鳥島」は入っているか—歴史意識の現在と歴史学』(岩波書店)を著した。これは、見落とされがちな地域から日本史像の捉え直しをしようとする仕事の先駆的なものとも言えよう。2001年には、「いま「日本」を問い直す」という視点から、大石直正・高良倉吉・高橋公明著『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』(講談社)が発刊されている。また翌2002年には同じくシリーズものの一冊として、入間田宣夫・豊見山和行著『日本の中世15 北の平泉、南の琉球』(中央公論新社)が発刊された。この書籍は、周縁から見直す中世日本ということをやっている。これら2冊はいずれも中世を対象としたものではあるが、地域から全体を捉え直そうという視点から著された書籍

であった。このような動きは近現代史においても見られた。地域史から全体史を構想する試みとしてまとめられたのが、近世史・近代現代史を専門とする河西英通・浪川健治・M=ウィリアム=スティール編による『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ—多文化の歴史学と地域史』（岩田書院、2005年）である。この書籍は、「グローバルヒストリー」という言葉からもうかがい知れるように、地域からの視点で、日本列島を超えて世界史までをも射程に入れたものであった。さらにこの視点を押し進め、地域史から世界史像の再構成に取り組んだのが、浪川健治・デビット=ハウエル・河西英通編著『周辺史から全体史へ—地域と文化』（清文堂、2009年）であった。

このような地域史研究の動向は、東北史研究においても見られた。日本という枠組みを超え、日本の東北地方をアジア（北東アジア）との連続性や関係性の中に位置づけつつ、北からの視点で日本の全体史を捉え直そうという試みであった。1980年代後半には、北からの視点で日本の歴史を見直す動きとして、北海道・東北史研究会が複数回のシンポジウムを開催している。その成果は書籍としてまとめられている。それが、北海道・東北史研究会編による『北からの日本史—函館シンポジウム』（三省堂、1988年）、『北からの日本史（第2集）—弘前シンポジウム』（三省堂、1990年）、『海峡をつなぐ日本史』（三省堂、1993年）などであった。さらに、東北とアジアや世界との接続や連続性を意識しつつ提起されたのが、渡辺信夫編『東北の歴史再発見—国際化の時代をみつめて—』（河出書房新社、1996年）や東北学院大学史学科編『歴史の中の東北—日本の東北、アジアの東北』（河出書房新社、1998年）などである。このような動きは引き続き2000年代にも見られた。河西英通著『東北—つくりられた異境』（中公新書、2001年）、『続・東北—異境と現境のあいだ』（中公新書、2007年）は、東北という概念の形成や近代以降の東北の置かれた状況から日本という国を見つめ直し、日本史像の再構成を試みたものであった。そして、東日本大震災により東北の諸矛盾が顕在化した時期ともいえる2012年から2014年にかけて刊行されたのが入間田宣夫監修『講座東北の歴史』（全6巻）（清文堂）であった。

このように、1980年代以降、地域史研究・東北史研究が進展し、地域史から全体史を捉え直すこと、さらには東北をはじめとする諸地域から世界史像の再構成を試みる取り組みなどに多くの成果が生み出されてきたわけである。

しかし、歴史教育の現場では、このような歴史学の成果を十分に活かすことができていないのではないだろうか。

学校教育の現場では、近年、アクティブラーニングの推奨や「コンテンツ・ベース」から「コンピテンシー・ベース」へという言葉の前に、ともするとコンテンツがおろそかになり、人文科学や社会科学等の研究成果が十分に活かされていないような傾向もみとれる。歴史学の研究成果を教育の論理という視点から学校教育の中にどのように位置づけ、生徒の思考の深まりを促していくかということが本来の歴史教育の仕事であろう。本来、コンテンツとコンピテンシーは二項対立的に捉えるべきものではないはずである。「コンテンツからコンピテンシーへ」というのは、これまでの極端な知識偏重を批判しているのであって、コンテンツを否定しているわけではないのである⁶⁾。

それでは、ここに見たような歴史学、地域史研究の成果を歴史総合の中にどのように活かしていけばよいのだろうか。次に、新科目歴史総合の構成と内容を確認しながら、地域史研究の成果を位置づけていく方向性を探してみたい。

3. 歴史総合の構成と地域史

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（東洋館出版、2019年）（以下、『地歴解説』と略記する）をもとに、歴史総合の中で近代以降の東北地域史をどこに位置づけ、どのように取り上げていくことが可能であるのかを確認していくことにする。

『地歴解説』（128頁）には、「2 内容とその取扱い〈歴史総合〉の学習の構成」①大項目の構成」として、「歴史を学ぶ意義や歴史の学び方を考察する大項目A「歴史の扉」と、近現代の歴史の大きな変化に着目した大項目B「近代化と私たち」、大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、大項目D「グローバル化と私たち」の四つの大項目によって構成されている」とある。このうちの大項目A「歴史の扉」は、この科目の導入として位置づけられており、歴史を学ぶ意味や歴史の学び方を学ぶ内容となっている。大項目B以下については、「大項目B「近代化と私たち」では、産業社会と国民国家の形成を背景として、人々の生活や社会の在り方が変化したこと、大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」では、政治、外交、経済、思想や文化などの様々な面で国際的な結び付きが強まり、国家間の関係性が変化したことや個人や集団

の社会参加が拡大したことを背景として、人々の生活や社会の在り方が変化したこと、大項目D「グローバル化と私たち」では、科学技術の革新を背景に人・商品・資本・情報等が国境を越えて一層流動するようになり、人々の生活や社会の在り方が変化したことを扱う」とされている。また、BからDの大項目にはそれぞれ(1)から(4)までの4つの中項目が配置されている。このうち中項目(1)について『地歴解説』(129頁)は、「生徒にとって身近な生活や社会の変化を表す資料を取り上げて、情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を身に付けるとともに、歴史の大きな変化に伴う生活や社会の変容について考察し、問いを表現する」としており、「学習内容に対する生徒の課題意識を育むことが大切である」、「表現した問いを以後の学習内容の課題意識とつながるように指導を工夫することが大切である」とも述べている。単元全体を貫く、あるいは単元の基底をなすような課題意識の明確化が求められている。これを受けて、中項目の(2)(3)については、「中項目(1)の生徒が表現した問いを踏まえ、主題を設定し、資料を活用して課題を考察する」とともに、「現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史の理解を深める学習となるよう工夫すること」が求められている。課題意識を踏まえつつ、内容の理解や考察を深めていくことになるわけである。そして、中項目の(4)については、「中項目(1)から(3)までの学習内容を踏まえ、「自由・制限」、「平等・格差」、「開発・保全」、「統合・分化」、「対立・協調」など、現代的な諸課題の形成に関わる歴史的な状況を考察するための観点を活用して主題を設定し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察し、表現する」となっている。ここまでの課題意識や内容理解を踏まえて、主題を設定し、現代的な課題の形成を歴史的に考察していくことになるわけである⁷⁾。

本稿では、近代以降の東北の置かれた状況を念頭に置いていることから、3つの大項目の中では、B「近代化と私たち」に着目していくこととしたい。そこで、大項目Bの中身についてさらに詳細にみていくことにする。

『地歴解説』(140~153頁)において、「近代化と私たち」では、大項目全体としては、産業社会と国民国家の形成を背景として、人々の生活や社会の在り方が変化したことを扱うことになる。そして、中項目(1)「近代化への問い」を受けて、中項目(2)「結び付く世界と日本の開国」では、「アジア諸国とその他の国

や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、18世紀のアジアの経済と社会、工業化と世界市場の形成を理解できるようにする」とし、中項目(3)「国民国家と明治維新」では、「アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、立憲体制と国民国家の形成、列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容を理解できるようにする」ことになっている。

そして、中項目(4)「近代化と現代的な諸課題」では、「現代的な諸課題につながる歴史的な観点から主題を設定し、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、主題について多面的・多角的に考察し、現代的な諸課題の形成に関わる近代化の歴史を理解できるようにする」となっている。この中項目(4)では、現代的な諸課題を念頭に置きながら、ここまでの学習内容を踏まえて、その課題と近代化という歴史的な動きとの関連性について考察を深めていくわけである。なお、中項目(4)については、先述の通り、「自由・制限」、「平等・格差」、「開発・保全」、「統合・分化」、「対立・協調」など、現代的な諸課題の形成に関わる歴史的な状況を考察するための観点を活用することも求められている。

それではこのような内容構成において、東北の地域史をどのように位置づけることが考えられるであろう

歴史総合の内容構成

A 歴史の扉

- (1) 歴史と私たち
- (2) 歴史の特質と資料

B 近代化と私たち

- (1) 近代化への問い
- (2) 結び付く世界と日本の開国
- (3) 国民国家と明治維新
- (4) 近代化と現代的な諸課題

C 国際秩序の変化や大衆化と私たち

- (1) 国際秩序の変化や大衆化への問い
- (2) 第一次世界大戦と大衆社会
- (3) 経済危機と第二次世界大戦
- (4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

D グローバル化と私たち

- (1) グローバル化への問い
- (2) 冷戦と世界経済
- (3) 世界秩序の変容と日本
- (4) 現代的な諸課題の形成と展望

歴史総合の内容構成

か。中項目(1)では、問いを設定することになるので、単元の全体を意識して、東北地域ということに限定するのではなく、日本全体や世界の動きとの関連を意識していくことが必要になると考える。「近代とは何か」といった、近世との相違や連続性などを視野においた近代化全体を包括するような大きな問いを設定していくことになるであろう。その上で、中項目(2)と(3)において、東アジアや世界の動きと日本との関係性、幕末から明治維新への動き、国民国家の形成などに関連してその時々東北の様子やもたらされた影響に随時ふれていくことも可能であろう。そして、中項目(4)において、東日本大震災以降に顕在化してきた東北を取り巻く状況の中に現代的課題を見出し、「東北にとっての近代化とは何か」という主題を設定して、史資料をもとに考察を深め探究していくことが考えられる。いわば、中項目(4)を中心に据え、そこに向けて単元全体の構成を構築していくというものである。

それでは、次に「東北にとっての近代化とは何か」という主題を設定した中項目(4)での具体的な授業の方向性について提起していくことにしたい。

4. 「東北にとって近代化とは何か」の授業構想

具体的な授業の構想を進めるにあたっては、弘前市およびその周辺(津軽地域)で実践することを想定し、津軽地域に暮らす高校生の物理的な生活世界との接点を踏まえて進めていくことにする。また、現代的な諸課題の形成に関わる歴史的な状況を考察するための観点のなかから「統合・分化」を意識していくものとする。

弘前という土地には明治・大正期に建築された多くの西洋建築物、いわゆる「洋館」が現存しており、観光名所の一つとされている⁸⁾。実は弘前に洋館が多く残されていることの背景に、「近代」とよばれた時代に弘前の人々が明治政府へのある種の対抗心から独自の近代化を進めようとしたことが関係している。そこで、洋館を入り口として弘前から見た東北にとっての近代化を考える授業プランを検討してみたい。

4.1 弘前にはなぜ洋館が多いのか

弘前観光コンベンション協会が発行している『ひろさきガイドマップ』や同じくコンベンション協会が作成しているパンフレット『洋館とフランス料理の街ひろさき』などからわかるとおり、弘前では観光名所の

一つとして西洋建築(=洋館)を位置づけている。しかし、洋館巡りや西洋建築を観光名所としている都市は、弘前ばかりではなく日本全国に存在している。函館、横浜、神戸、下関、長崎などの都市でも西洋建築が観光名所となっている。これらの都市と弘前を比較したときにある相違があることに気づく。函館や横浜などの都市はいずれも海に面しており、海港を持つ都市である。一方、内陸に位置する弘前には海港は存在し得ない。函館や横浜などはいずれも、明治期には商業や外交など欧米との交流の窓口となっており、領事館が置かれていたり、外国人居留地が設置されていた。そのために、必然的に欧米人向けの西洋建築が多くつくられたわけである。しかしながら、同じように洋館が多くつくられてはいても弘前には海港もなく、欧米との交流の窓口ともなっていたわけでもない。どのような背景があるのだろうか。さらに、いくつかの洋館での聞き取りをおこなったところ、「雪が下ろせずに屋根が傷み、雨漏りに悩まされている」(旧弘前市立図書館)、「雪下ろしの時に屋根の瓦が割れて困っている」(弘前偕行社)、「雪の多い冬場の湿気に苦慮している」(百石町展示館)などの声が聞こえてきた。洋館は雪の多い弘前にはあまり向いていない建築様式であることもわかった。それにも関わらず多くの洋館がつくられている。このことから、「弘前にはなぜ洋館が多いのか」という問いが設定され得る。

4.2 つくられた東北の「後進性」

そこでまずは、洋館が建築された明治期の東北(北東北)の状況を考えてみたい。
(*以下、〈資料〉は後に示す授業展開の概略にある資料の番号と対応している。)

〈資料1〉

紀行文の方はどうでしょうか。1881(明治14)年に住友家の中心人物で関西財界のリーダーでもあった広瀬幸平の紀行文『東北紀行』が刊行されています。広瀬が大阪から北海道まで旅行した様子をまとめたもので、「東北」に北海道まで含んでいる点が注目されます。広瀬は宮城県松島あたりで「仙境」に入ったと感想をもらしていますが、岩手県との県境に近い金成村に至って、外見上は男女の区別がつかず、彼らの言葉＝「土人の蛮舌」を解することができないとのべているほか、岩手県の花巻や渋民、青森県の八戸では旅館の不潔さを嘆き、青森県の小湊(現平内町)では「飯色土ノ如き食事に「失笑」しています。

1884(明治17)年には元立憲帝政党の水野寅次郎ら

の東京から北海道までの『東北紀行』が出ています。水野も「東北」に北海道を含めています。彼は栃木県から福島県に入るあたりで「域ヲ異ニスルノ感」を抱いていますが、青森県に入った直後の三戸（現三戸町）での感想はこうです。「是ニ至テ我一行益々東北地方ノ猶ホ野蛮ヲ免レズ交通ノ何タルヲ知ラザルヲ嘆ジ相顧ミテ盛岡以北人ナシノ語ヲ発スル者屢々ナリ」。盛岡から北は野蛮の地とされました。青森に着いたとき、彼は「盛岡以北人ナシ」とは、無人ということではなく、「真ノ国民タル資格ヲ備フル者」がないことなのだとして記しています。（河西英通『東北一つくられた異境―』中公新書、12～13頁）

この資料からは、東北地方、特に青森県を含む北東北について、明治期の中央政府側の人々がどのようなイメージを抱いていたのかを理解することができる。すなわち、北東北は「野蛮」、「未開」などの後進性のイメージで捉えられていたわけである。このような捉え方について、北東北、青森県に暮らす高校生はどのようにうけとめるであろうか。おそらくは、少なからず衝撃を受けることが想定される。

しかし、本当に北東北は後進地域だったのであろうか。江戸時代には、各藩がそれぞれに様々な発展を遂げていたはずである。北東北はなぜ後進地域とされることになったのだろうか。

〈資料2〉

そうした東北観を戊辰戦争（1868〈慶応4〉年）が固定化しました。幕末維新期の東北を分析した田中秀和氏は、戊辰戦争によって、東北が蝦夷地同様の「未開」地として設定され、「未開」とは、「天皇を知らないことであり、天皇に刃向かうこと」だったと論じています。基本的に、近世の北方社会において、「未開」とは異民族アイヌを指していたのに対して、戊辰戦争をへた近代において、「未開」とは異民族アイヌおよび軍事的敗者（朝敵）＝東北を指すこととなり、「非未開」＝「開化」とは軍事的勝者（官軍）＝西南を意味したのです。

近世後期における東北＝異境・異域イメージが基盤にあったればこそ、幕末維新期における奥羽越列藩同盟の軍事的敗北は、東北にあらためて「未開」性を付与したというべきでしょう。言い換えれば、西南諸藩が列藩同盟に敵対したという政治的選択・判断の正当性が、軍事的勝利によってではなく、近世以来の東北＝異境・異域に対するいわば文明論的勝利によって支えられたということです。（河西英通『東北』10～11

頁）

東北の「後進性」は明治期に作り上げられたイメージであることが理解できる。戊辰戦争により西南雄藩による中央政府（「薩長政府」）が成立する。これにより「東北＝後進、未開」のイメージが確立されていくのである。また、薩長政府＝「文明、善、正当」ということを人々に知らしめる、あるいは薩長の自己認識のために「文明、善」と対置する「未開、悪」の存在が必要となる。つまり、「正義の味方」が活躍するためには「悪者」が必要で、東北がその悪役を担わされたのである。

4.3 政府軍に味方した東北諸藩のその後

それでは、奥羽越列藩同盟から早い段階において離脱し、西南雄藩による中央政府軍に味方した東北の藩はどのような状況であったのだろうか。ちなみ、いち早く離脱したのは、久保田藩（秋田）であり、ついで離脱したのが津軽藩（弘前）である。

〈資料3〉

旧秋田藩は戊辰戦争のときに、東北諸藩との盟約を破って官軍方についた。平田篤胤の系譜をひく勤王派が藩政の方向転換を進め、新政府に与したのであった。しかしながら、戊辰戦争終了後の新政府は、秋田藩を東北諸藩と同じように厄介者として扱い、決して優遇的な対応はしなかった。（塩谷順耳『秋田県の歴史』山川出版社、2001年、281頁）

〈資料4〉

秋田藩などのように新政府側についた藩もやがて“賊巢”と疑われ、「戊辰の功勞。その後の疎外」という状況に置かれました。（河西英通『東北』、11頁）

久保田藩（秋田）は、盟約を破り、いち早く列藩同盟から離脱し、政府軍に味方している。それにもかかわらず、列藩同盟の諸藩と同じような処遇を受けていることがみてとれる。一番目の久保田藩をしてこの状況である。二番目に離脱した津軽藩の状況も推して知るべしといったところであろう。実際のところ、津軽藩については、津軽藩士であった本多庸一に関して、「本多の場合、津軽藩はすでにみたように必ずしも佐幕派に終始したわけではなかったが、結局、薩長勢力が主導権を握る明治政府の権力圏から疎外され、矢張り陽の当たらぬ場所におかれざるを得なかったのである」⁹⁾との指摘もなされている。津軽藩もまた明治期には冷遇されていたのである。東北諸藩との盟約を

破った、すなわち盟友に対する「裏切り」をおこなってまで、政府軍に加勢したわけである。それにもかかわらず、厳しく処遇されていた状況に、当時の秋田や弘前の人々の心持ちはどのようなものであったのだろうか。生徒たちは共感的に理解することができるのではないだろうか。

4.4 弘前の近代化

明治期の日本はでは政府による国民国家形成のもとで近代化が推し進められていった。そのような政府による国民国家の形成、近代化に対して弘前の人々はどのように対応していったのだろうか。もちろん、弘前の人々が世界の流れに抗して前近代的なものを維持しようとしていたわけではない。先に若干ふれた本多庸一について次のように述べられている。

〈資料5〉

優位の才を抱きながら、志を伸ばし得るチャンスから疎外された彼らは、行政の中央部から切り離された外交という分野に雄飛するか、或いは西洋文化をマスターして文化的主導権を握るといった領域に進出するか、そのいずれかの途で、陽の当たる場所に出ようと試みた。…（中略）

そして、この実力を身につけるためにかれらは横浜や神戸に集まり、夢寐にも忘れぬ薩長藩閥政権への対抗意識に心を燃やして、英語を学び、洋学修行にうち込んだのであった。（氣賀健生『本多庸一』、46頁）

弘前においても西欧文化の積極的な受容（＝近代化）が目指されていた。ただし、それは明治政府が進める近代化の流れに乗った動きではなかった。あくまでも、薩長を中心とする明治政府への対抗心を抱きつつの近代化であった。弘前においては独自の形で欧米の文明（その代表としてのキリスト教）を積極的に受容する動きが起こったわけである。そしてその中心となったのが東奥義塾であり、メソジスト教会（現日本キリスト教団弘前教会）であった。また、弘前における近代化の動きの中では、女子教育のために教会内に弘前女学校（現弘前学院）がつけられている。これらのことは以下の資料から確認することができる。

〈資料6〉

1874年（明治7）、津軽藩の藩校をルーツに持つ「東奥義塾」が、元津軽藩士でキリスト教徒であった本多庸一を初代塾長として、北米のメソジスト教会より日本に派遣されていたJ. イング宣教師を英語教師として招聘しました。二人の感化を受けた東奥義塾

の生徒22名が洗礼を受けてキリスト教徒となりました。彼らを中心として1875年（明治8）10月3日、東北最古のプロテスタント教会として弘前公会（現弘前教会）が誕生しました。初代日本人牧師は本多庸一です。以後、津軽一円にメソジスト派の教会が生まれます。彼らはキリスト教信仰に立って津軽の近代化やキリスト教布教に多大な貢献をし、後に「弘前バンド」と呼ばれました。また、東奥義塾はキリスト教主義を掲げ、多くの人材を世に輩出しました。…（中略）…また、女子教育の必要を説き、遺愛女学校（函館）の協力を得て、弘前女学校（現弘前学院）を当教会の和室で誕生させました。（日本キリスト教団弘前教会パンフレット『ようこそ～日本キリスト教団弘前教会のご案内』）

このように、キリスト教や西欧文明の受容のため、政府のルートに頼らず宣教師を直接アメリカから招いた。そうした宣教師のために住宅や施設がつけられたのである。それが現存する洋館である旧東奥義塾外人教師館と弘前学院外人宣教師館である。また、これらの学校と非常に関係の深い日本キリスト教団弘前教会である。これらの洋館が建てられた背景には、明治期弘前が中央政府に対抗し独自の近代化を推し進めようとした動きがあった。ところで、〈資料6〉にあるように西欧文明受容の中心となった東奥義塾は津軽藩の藩校稽古館が前身である。下の写真の石碑にあるように稽古館の跡地はすなわち東奥義塾の跡地となっている（弘前市立図書館前）。全国の多くの藩校が官立となるなか、東奥義塾は何度かの経営危機があっても官立となることを拒み、あくまでも私学にこだわったのだが、それはなぜだろうか¹⁰。



稽古館・東奥義塾の跡地（筆者撮影）

〈資料7〉

菊池自身の教育観を知るうえで、興味深い資料は、明治25年11月から12月にかけて自由党党報に連載された「官立公立中学校廃止論」、及び明治33年3月に東奥日報紙に連載された菊池自身による論説「教育界の根本的革新」である。前者において菊池は、現行の中等教育制度への危惧の念を明らかにし、政府は地方税及び国税をもっての中等教育維持をやめ、針路大要を示した後は、詳細の組織は私立学校に一任するべきであるとす。菊池の意見によると学校とは「優勝劣敗の原理に基きて浮沈するを以て、之を書生の撰択父兄の取捨に一任」しても、社会の必要に応じる秩序整然たる制度ができるものであるからである。また、約8年後に書かれた後者の論説においても、菊池は「教育本来の目的」とは「精神的自由教育の旗幟を擁して人物の養成を期」す事であり、育英事業は本来官立の拘束を受けるより、自由な私学教育によるべきと主張する。（北原かな子『洋学受容と地方の近代—津軽東奥義塾を中心に—』岩田書院、2002年、29頁）

この資料に登場する菊池とは、菊池九郎のことであり、本多庸一の盟友として東奥義塾を創るなど弘前の近代化を牽引した中心人物の一人である。菊池は、官立となると政府からの財政支援を受けられるのだが、政府には頼りたくないと考えていた。財政支援を受けることで自分たち独自の教育や人材育成ができなくなることを恐れていたのである。ここにも、政府への対抗心や独自性をみてとることができる。

4.5 弘前の近代化その後

戊辰戦争で「後進性」のレッテルを貼られた東北のなかで、弘前では政府に対抗して独自の近代化を目指す動きがおこり、結果として洋館が多く造られることになった。こうした政府への対抗心は、自由民権運動にも結びついていった¹¹⁾。しかし、「後進性」は果たしてその後払拭されたのだろうか。今の東北の現状はどうであろうか。

また、一方で政府への対抗心、自分たちの存在感を知らしめようとする動きは、日本がアジアへの進出、大国化を目指すときにその一端を積極的に担うことに結びついてしまった可能性もある。独自の近代化を牽引した本多庸一が、日露戦争に際して、キリスト教者の代表として教会関係をまとめ、積極的な戦争協力をうたっていることにも注意する必要があるだろう¹²⁾。

国民国家としての統合を進める政府、そのなかで後進性のレッテルを貼られ、それに対抗するように独自の近代化を目指した弘前の人々。そして、日本の大陸進出への積極的な関与といったことを踏まえて、どのように考え、評価していくべきなのかということを高校生には問うていきたい。

授業全体としては2時間を想定しており、1時間目でここまで述べてきた展開を実施し、それを受けて2時間目には生徒たちそれぞれに「東北にとっての近代化」についての意見形成を行ってもらい、さらに意見交流の機会をもうけて、個々の認識を深めることをねらっていく。

（＊1時間目の授業展開についての概略は次頁に示しておく。）

5. 終わりに—地域史を組み込んだ歴史総合の可能性—

歴史総合は2022年度からはじまる。現時点（2022年1月）で多くの現場では、まだ実践に向けて戸惑いがみられる状況にある。今回の科目改編は、知識偏重の歴史学習から、資料をもとに考察し思考する歴史学習への転換を目指してのものである。しかしながら、相変わらずの事項解説中心の歴史授業がおこなわれ続けることも懸念されている。2006年のいわゆる「世界史未履修問題」が生じた原因はいくつかのあるのだが、その一つに学習者である高校生が、必修科目となっている世界史に対して学ぶ意義を見出せなかったことがある。あまりにも自分たちの生活世界とかけ離れ、物理的にも精神的にも遠い世界での出来事を学ぶことに、学ぶ意義を見出せなくなったのである。それは、日本史にも起こりうることであった。政権所在地ばかりからの視点、自分たちとは異なる支配層からの視点ばかりでは、高校生たちの生活世界とは乖離してしまう。そのときに「受験」という目的を外してしまうと学ぶ意義をどれほど見出せるのであろうか。自分たちの生活世界との接点、自分たちの生きる「今」との接点にふれることで、学ぶ意味を見出すことも可能になるであろう。

そうであるならば、現代的な諸課題の形成を歴史的に考察しようとする歴史総合に、地域の視点を組み込むことによって、高校生が学ぶ意味を見出せる可能性は高まるのではないだろうか。

本稿では、東北の近代化という視点から、「統合・分化」の観点を意識して大項目B「近代化と私たち」

授業の概略

段階	学習内容	教師の働きかけ	留意点・資料等
導入	洋館のまちひろさき	<p>問)「弘前」と言えば何の街か (*「〇〇のまち弘前」) ・「珈琲のまち」、「洋館のまち」などにふれる ・洋館が観光地となっている街を予測させる</p> <p>問) 洋館が観光地となっている街の共通点は? ・弘前は港町ではないのに洋館が有名である</p> <p>・洋館の欠点について聞き取り紹介 → 雪の多い弘前にはあまり向いていない</p>	<p>観光パンフ活用 ガイドマップ活用</p> <p>地図の利用</p> <p>洋館の画像提示</p>
展開	<p>作られた後進性</p> <p>政府軍に味方した藩のその後</p> <p>弘前の近代化</p>	<p>弘前にはなぜ洋館が多いのだろうか?</p> <p>・資料から他の地域の人々の東北観を読みとらせる ・資料から後進性イメージの形成を読みとらせる 「薩長＝文明・善」⇔「奥羽＝未開・悪」 → 戊辰戦争と東北関係に目を向けさせる</p> <p>問) 東北でも早くから薩長に味方した藩は? その藩はどうなっただろうか? → 資料提示、冷遇されたことに気付かせる</p> <p>問) 二番目に味方した藩は? どうなったか? → 弘前が冷遇されたことに気付かせる</p> <p>問) ひどい扱いを受けた弘前や秋田の人はどのように考えただろうか → 当時の人々の感情を考えさせる → 薩長(政府)を見返すためにどうすればよいかを考えるよう促す</p> <p>・「文明開化」の流れ → 政府が積極的に欧米文化を取り入れた</p> <p>問) 政府への対抗心をもった弘前の人々はどうしただろうか? → 資料からキリスト教(＝西洋文明の象徴)を積極的に受容したことを読みとらせる → 独自の近代化を目指したことに気付かせる</p> <p>・日本キリスト教団弘前教会、東奥義塾、弘前学院大学について説明</p> <p>問) 東奥義塾はなぜ私立なのだろうか? → 資料提示、政府の支援を嫌って私学となったことに気付かせる</p>	<p>〈資料1〉 〈資料2〉</p> <p>〈資料3〉〈資料4〉</p> <p>当時の弘前の人々に共感的に考えられるようにする</p> <p>〈資料5〉〈資料6〉</p> <p>「稽古館跡地」の写真利用</p> <p>〈資料7〉</p>
終末	<p>まとめ</p> <p>近代化のその後</p>	<p>【例】 戊辰戦争で「後進性」のレッテルを貼られた東北の中で、弘前では政府に対抗して独自の近代化を目指す動きがおこり、結果として洋館が多く造られることになった。</p> <p>後進性イメージは払拭されたか? 「東北にとっての近代化とは何か」を問う</p>	

での教材化を検討した。東北史研究の成果に依拠し、同様に東北からの視点で大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、大項目D「グローバル化と私たち」における教材化も可能である。また、その際に、「平等・格差」、「開発・保全」といった観点を活かして東北からの視点で考察することも考えられる。

さらに、日本の他の地域でも同じように地域からの視点で教材化はできるに違いない。今や地域史研究においては多くの成果が蓄積されており、その成果を活用すれば全国各地で地域からの視点を組み込んだ授業を構想することは可能である。いくつもの日本史があるように、全国の高校生がそれぞれの暮らす土地から日本—世界を見つめ直す歴史総合も可能であろう。

実際に歴史総合の授業がはじまってからも、現場の戸惑いが続くことも十分考えられる。その戸惑いのなかで事項解説中心の歴史総合の授業が多くならないように、今、歴史学習に求められていることは何か、何が必要なのか、また、高校生にとって学ぶ意味が見出せる歴史学習とは何かということを改めて強く意識し、より望ましい歴史総合の実践について検討を重ねてみたい。

注

- 1) 実際には、世界史以外にも倫理、情報、保健等の科目においても未履修が見られたのだが、世界史にもっとも多く見られたために、広く「世界史未履修問題」といわれるようになってしまった。詳しくは、拙稿「世界史未履修問題に見る世界史教育の現実」『地域から考える世界史—日本と世界を結ぶ』(勉誠出版)2017年所収を参照。
- 2) この間の経緯や歴史総合の課題等については、拙稿「「歴史総合」の可能性と課題」『中等社会科の研究—「地理総合」「歴史総合」「公共」の可能性と課題』(三恵社)2018年所収を参照。
- 3) https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2019/07/08/1417610_001.pdf
- 4) 河西英通『東北—つくられた異境』(中公新書)2001年
- 5) 河西英通『東北史論—過去は未来に還元する—』有志舎、1~2頁
- 6) 教育学の石井英真は、コンピテンシー重視の傾向が、コンテンツ軽視の「誤解」を生んでいることや生徒自身が本当に学ぶ価値があると思える教材(学習内容)と真剣に向き合うところにこそ思考力の育成やアクティブラーニングは生まれてくるということを指摘している。石井英真「資質・能力ベースのカリキュラム改革」『流行に踊る日本の教育』(東洋館出版)2021年、18~41頁
- 7) 大項目Dの(4)については「現代的な諸課題の形成と展望」となっており、大項目BおよびCの(4)とは些か異なる位置づけとなる。「現代的な諸課題の形成と展望」は、この科目のまとめとして位置付けられている。これまでの学習の成果を活用し、生徒が持続可能な社会の実現を視野に入れ、主題を設定し、歴史的な経緯を踏まえた現代的な諸課題の理解とともに、諸資料を活用して探究する活動を通し、その展望などについて考察、構想し、それを表現できるようにする」とされている。文部科学省『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』(東洋館出版)2019年、129頁
- 8) 弘前市観光コンベンション協会が発行している『ひろさきガイドマップ』には「浪漫の街を歩く—洋館」として、10棟の洋館が紹介されている。また、このガイドマップに紹介されていない洋館も現存する。
- 9) 氣賀健生『本多庸一—信仰と生涯—』(教文館)2012年、46頁
- 10) 東奥義塾は、経営難から1910(明治43)年、青森県立弘前中学東奥義塾となり、さらに1913(大正2)年には一度廃校となっている。その後、私学として再興され、現在も続いている。(東奥義塾高等学校ホームページ・学校案内「東奥義塾の歩み」より <http://www.gijuku.ac.jp/info/05.php>)
- 11) 弘前の自由民権運動には、本多庸一、菊池九郎をはじめ、東奥義塾の関係者が関わっていた。このことから、政府への対抗心がうかがわれる。
- 12) 小川原正道『近代日本の戦争と宗教』(講談社)、2010年、115~125頁

* 謝辞

本稿は、令和2年度科学研究費助成事業(基盤研究(C)課題番号20K02723)の助成を受けた成果の一部である。

(2022. 1.21 受理)